
如果這樣 2（ルークオザーヤン）

y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

如果這樣2（ルীগオザーヤン）

【Nコード】

N0738G

【作者名】

y

【あらすじ】

「真説ボボーボボ」68話「燃え上がるハジケ魂！3人の絆」（ネオ新宿で終・邪ティ・BBがボボーボ一行に敗北した所）後を「こうだったらよかったな」と考えたファンフィクションです。ムーンライトノベルズ（18歳未満閲覧禁止）掲載「如果這樣1」
<http://ncode.syosetu.com/n0741g/>の続きとなりますが、内容は独立しています

ネオ新宿戦（前書き）

集英社「ボボボーボ・ボーボボ」のファンフィクションです。各関係者・団体とは一切の関係はありません

ネオ新宿戦

「予想外の強さだね・・・計画を修正しよう。一時退却だ、邪ティ」

帝国ネオ新宿区ーーボーボボ一行は柊・邪ティ・BBの強力な敵を融合戦士の最大奥義で撃破した。その強力な奥義によって吹き飛ばされ、隣に蹲る邪ティに柊は声を掛けた

「ああ・・・融合戦士とやらのデータが過小評価されてたみたいだな」

邪ティは腹部を押さえ、声が小さい。元三大王のバブウを倒す程の強力な能力を持っている彼女ではあったが、唯一の弱点は少女であるが故のその体力の無さ。短時間で終わると読んでいた柊の計算は少々外れた。彼の戦い方において重要な相棒である邪ティの体力はもう限界のようだった

「パンツ丸おいで」

柊がそう呼びかけると今まで一体何処にいたのか、巨大なパンツが二人の元へと着地した

「おい！てめえら逃げる気か？ってかそのパンツでーーー！」

融合戦士が元の三人に戻っている。強力な一撃を食らってなお立ち上がる柊と邪ティに驚きながらも、巨大パンツにツツコんでいる

「待てやコラァー！」

ボーボボ等が自分達に走り寄って来るのを見て、柊は邪ティをパンツ丸の上に促した

「おい柊・・・そういえばBBはどこだ？」

邪ティは周囲を見回すーーすると、共に強力な一撃で吹き飛ばされたと思っていた黒い大男は

「オラァ！せっせせーのよいよい♪じゃーー！」

ボーボボとカウンター合戦をしていた

「ってなんつー凶悪なおゆうぎだー！」

「黒いの！ナイスツツコミ！」

周囲から妙な感嘆の声が上がる。柊まで親指を立ててグツジョブ！の笑顔に邪ティは呆れた

「おい！スク水野郎！その黒い女の子置いてけよ！ツツコミ足んねーんだよこっち人数増えちまってよお！」

首領パッチがパンツ丸の上に乗る邪ティを指差して叫ぶ

「じょーだん。彼女は僕専用のツツコミでねーじゃあねバイバーイまた近い内に会いましょーう」

柊がケラケラ笑いながらパンツ丸の上に乗ってくる。パンツ丸がふわりと浮いた

「柊！BBはどうするんだよ！あいつを確保するのも計画のひとつだろ？置いて行くのか？」

柊は一瞬ーーボーボボとぐだぐだやってるBBを見下ろした

「いーよ。彼は御し辛い。どうも予想と違ったよ。今回はいい。しばらく単独で泳がせておこう」

「何言ってるんだ！私は研究所であいつに一回逃げられてんだよ！今度こそーー」

邪ティは浮き上がるパンツ丸から飛び降りようとしたが、その腕を柊が思わぬ力で掴んだ

「俺の命令に逆らうのか？」

その瞳が真紅に変化する。邪ティは憮然とした表情で乗り出した身を戻す。すると柊の瞳の色は元に戻り、手は外された

「おーいてめえ！この黒いボーボボ持って帰れ！いらねーよこんなかさばるの！ってかこれ以上暴君を増やすんじゃねえええ！」

首領パッチと天の助がBBにボコボコにされている。がははと笑うボーボボもそれに便乗して首領パッチ達はもう瀕死の状態であった「やめろよ！こらー！」

見かねたビュティが走り寄ろうとすると、BBはビクン！と弾けるようにボーボボ達から離れ、駆け出した。その余りのスピードにボーボボ達も追うことが出来ないようだった。もうかなり上空まで浮

き上がったパンツ丸の上から邪ティは離れていく黒い巨体を目で追った

「……すると

「……」

BBが一瞬「……」だろうか、空に浮かぶパンツ丸の方角に顔を上げ、何事かを叫んでいるようにその大きな口が動いた。既にかなりの距離がある為、それは言葉としては認識できなかった

「……なんか言ってるよ……」

終はその方向を見ていない。腕を組んで何事か考えているようだったが

「ほっときなよ」

そう一言呟いただけで、さして興味もなさそうに無表情だった

「……」

邪ティは暫くBBを見ていたが、やがて一つ溜息をつくとパンツ丸の柔らかい生地の上に身を預けて、その張り詰めていた緊張感を緩めた

帝國王城（前書き）

帝国（柊・邪ティ・キング三世）サイドです

帝國王城

「邪ティ、シャワー浴びて少し眠りなよ。僕はちよつと三世様にご報告に行つて来るからさ。夕食までには戻るからその時今後の予定を話し合おう。パンツ丸、よろしくね」

柊・邪ティ・パンツ丸は一度帝国郊外の邸宅に戻った。そこで柊は衣服を整え邪ティに休むように言い、車で帝国首都へと向かった

「――柊。どうだった、ヤツと戦った手応えは」

王座の間に入ってきた柊に、玉座に座っている三世が声を掛けた

「はい。中々の強さでしたね。特にあの融合とやらは厄介でした。

まあ今回戦ったのは様子見の意味でしたし、あの辺が引き際だと思つてましたし・・・勿論ご覧になってたんですよね？」

柊は片膝を床につけ、常の笑顔でそう言った

「フン・・・まあ良い。新たな三大王としてお前は私の参謀となれ」

「え？以前も申し上げましたけど、僕はそんな器じゃないですよ。

そんなコトしたらバブウ様に怒られちゃいますよ。って・・・バブウ様は？姿が見えませんか」

常に三世の傍らに侍っている筈のバブウの姿は無い

「バブウは研究所で何者かに襲われ氷漬けにされた。完全に活動停止状態だ。どのような火器でも融解させることが出来ぬ」

柊は笑顔を止め、深刻な表情を作る

「どういふことですか？バブウ様を倒せるような敵がこの帝国中枢にある研究所にまで侵入したというのですか？奴等はまだネオ新宿区辺りにいる筈ですが」

「研究所は大破し、他研究員も全て凍らされて絶命している。監視モニターも全てだ。緊急事態であれば自動警報が鳴る筈であるが、非常に短時間にその状態になったようだ」

三世は一つ、息をつく

「恐らく……一年前のあのクローンの少女だと思われる」

三世が右手を上げる……天井から大きなモニターが下りてきた。そこにはボーボボ一行とネオ新宿区で戦った柊等の映像が映し出される

「……さて、柊。どう説明する？」

柊はモニターに目を向ける。勿論そこには驚異的な氷の能力を駆使して戦う黒い少女が映し出されている

さてと、車の中で考えてたお話をちゃんとか説明申し上げないとまあ計画ではあのままボーボボ達を全滅させてそのままこのキングを倒そうと思ってたからなあ

だからこそ邪ティの存在を表に出したんだけどね

ま、済んだことは仕方ないさ。多くの因子を含んでいる僕の計画は幾らでも修正がきく

正念場、ってヤツか……

「この黒い少女はキング三世様のご推察通り……一年前からずっと僕が確保していましたよ」

三世の眉が上がるが「それで？」と無表情を崩さず三世は促す

「まあ何故隠していたのかというんですね、彼女はバブウ様、勿論自分を造るように直接の命令を下した三世様を非常に憎んでおりまして、三世様に引き渡すなら自害するとまで言い出しましてね……仕方が無いので僕が匿ってあげる、と説得したんですよ」

「この私が引き渡せと言っただろう。何故従わなかった。貴様が何だかんだと理由をつけて少女の搜索を有耶無耶にしているのは分かっていたのだ」

「お怒りはごもっともです。ですが彼女は途轍もない能力を持っています。とにかくこちら側につけなければいけないと思ったんです。しかし彼女は帝国自体を憎みきってる。ならば僕が帝国を裏切り彼女の存在を隠し、僕を味方と思わせる……しかないと思ひまして」三世は立ち上がる。ゆっくりと柊の元に歩み寄って来た

「狸が……苦しい言い訳にしか聞こえぬな。少女に隠し、幾らで

も私に報告出来るだろう」

三世の背にある触手のような物体が跪く柊の首に巻きついてきた。柊は微動だにしない

「彼女は非常にカンが鋭い――そんな小細工は通用しません――洗脳を完全にする為の手段です」

ククツと柊が笑った。その瞳が真紅に変化していく――冷たい氷のような微笑

「少々時間が掛かりましたが」

柊がゆっくりと立ち上がる

「既に彼女は僕の意のままです」

触手の収縮が急激に強くなった

「バブウを機能停止にさせたのは貴様か」

至近距離まで近づいている三世に臆することなくその氷の炎の如き瞳を向ける

「ご推察の通り。バブウ様はBBを使ってクーデターを企んでいましたからね」

「なんだと?!」

三世の表情が変化した

「BBさえ完成してしまえば彼の知識はもう殆ど出尽くし、無能で無用な存在です。そして黒いクローンの少女もまたバブウを特に憎んでいましたからね――帝国幹部の僕がバブウ殺害を命じたことは、彼女を僕に心酔させるのに更に役立ちましたよ?」

触手の拘束が緩んだ

「どういうことだ? バブウが私に対しクーデターだと?!」

三世の表情は明らかな驚愕。柊はそれを見逃さず言葉が続ける

「はい。確かな情報です。僕は研究所所員に何人か部下を紛れ込ませていますから。バブウはBBの洗脳を三世様ではなく、自らに絶対服従するようにデータを改竄し、BBを使いキングを暗殺しようと企んでいました。BB始動まで二時間程でしたが――何とか間

に合いましたよ」

触手がゆつくりと外され、三世は柊から離れ玉座に座り直した

「――私に造られた機械人形如きが・・・付け上がりおって！飼
い犬に手を噛まれるとは・・・強化人間計画の為に必要以上の権力
を与え過ぎたか・・・」

額に手をあて忌々しそうにそう呟く三世に、柊はゆつくりと近づい
て行く

「しかしバブウを倒せる者などそうはいない・・・キングが直接手
に掛けることなど帝国内紛の情報を他国に曝け出すようなもの――
ーだからこそ、僕は誰にも知られていない驚異的な強さを持つ刺客
を使いバブウを消去したんです」

常にその傍らに侍っていたバブウのように柊は玉座の側面に立ちに
っこりと笑った

「どうですか？僕は使えますか？キング三世」

三世は柊のその笑顔に思わず臆した。三大王就任を打診して来た時
――いや、一年前逃亡したクローンの少女の搜索を命じた時にも
感じた妙な違和感――一体この目の前の男は何を考えているとい
うのか

「――ああ、貴様は非常に使えるな。バブウなどよりも余程頭が
切れる」

三世はそう言葉を発し手を肘掛に戻した。それは柊が玉座の側面に
立つことを許したということだ

「ならば――BBは今何処にいる？ヤツの洗脳はどうなっている
のだ。ボーボ共が侵入しているというのに、これ以上BBまで暴
れられるような事があれば非常に厄介だ」
柊は少々困った表情を浮かべる

「BBは――大変申し訳ありませんが所在は不明です。先程戦っ
た時に発信機を付けたのですが感づかれたようです。全くモニター
に反応しません」

「そうか――ならば対策を言え」

「対策って程ではありませんが――大丈夫ですよ。彼はバブウの洗脳が完了しています。つまり常にボーボボを殺しに彼等の前に現れるでしょう――それしか存在理由がありません。既に手は打っておりません。僕はボーボボ一行の行動は把握出来ますから――Bが彼等の前に現れたら確保しに向かいますよ」

「しかしB Bを確保などそう簡単には出来んぞ」

「だからこそ僕は黒い少女を手に入れたんですよ、キング」
いきなり――あはは、と柊が笑い出した

「B Bはあの黒い少女を渴望している――あの少女に手は出せない」

笑いを堪えきれないようにクク・・・と笑う柊を、三世は少々の驚愕を持って見る。常の彼の笑い方ではないのだ。喉の奥から搾り出すように低い声で発せられるその気味の悪い笑い声――

「それは洗脳ではなく――本能。B Bは僕があの少女を使い必ず捕らえて――殺してお見せしますよ」

疑問（前書き）

ボーボボ一行サイドです

疑問

ボーボボ一行を乗せたバビロン33号はネオ東京湾上を水飛沫を上げて走っていた

「ボーボボさん・・・あのコスプレハジケリストは一筋縄じゃあ行きませんよ・・・」

バビロン33号の中――壁際に立つヘッポコ丸はソファに座るボーボボにそう声を掛けた

「ああ・・・全く実力は出して無かったみてえだな。俺達の融合に驚いていたって感じだったが・・・」

「様子見ってヤツじゃね――か!? あああああ!」

「流石ですおやびん――! ご明察でっす――!」

「って俺なんで――? なんだかもう溶けそうなんですけど――!」

バビロン33号の外から叫び声ともつかぬ首領パッチと破天荒、天の助の声が聞こえる。彼等は何故かボーボボにバビロン33号にくくりつけられジェットスキー宜しく海上を滑っていた。破天荒は自ら望んでであるが

「うるせえぞ役立たず共が――! 海上にも敵がいねえってこたあねえんだ! しっかり見張っとけコラア!」

「ええええ? なんでオレッスかダンナー!? 姐さんおたすけ――!」

「やりすぎだよ! そんなに監視役いらないって!」

ボーボボはガ王をむんずと掴み窓から放り投げる

「ボーボボ。恐らく先程のハジケリストは――お前が倒したバブウ直属の親衛隊・蒼の尖鋭兵団の男だ。俺の掴んだ情報によれば名前は柊。その若さに似合わず団のリーダーらしい。お前が倒したポルストイさえも恐れるかなりの実力者だ」

窓際でさりげなく外の様子を伺っているソフトンがそうボーボボに

声を掛ける

「え・・・あの強化人間が？」

ビュティの淹れてくれた紅茶をテーブルに肘をついて呑んでいるポコミが少々の驚きを持って呟く。蒼の尖鋭兵団ロー確かボーボボ抹殺を果たした褒美はそのエリート集団に入団を認められることだった筈

「だからこそあの蒼の尖鋭兵団は三世がいるネオ千代田区を含む中央、西東京を含むエリアを束ねている。ネオ新宿区から千代田区は非常に近いが今のまま三世の元へ挑んでも相手の戦力が多すぎる。勝算は低い」

ソフトンの情報は正確でありまた現実的であった。連戦が続く現在の戦力であるまま三世に挑むには無理がある

「ああ、だからこうやってネオ東京湾を走ってるんじゃないか。まずは相手の戦力を減らさなきゃなあ・・・取りあえず目的地は別エリア・・・ネオ台東区ロー白幻死装徒を潰すことだ」

「流石だ、ボーボボ」

ソフトンは安心したように手近なソファにゆっくりと座った

「ローねえ、ボーボボ・・・」

戦略に関することは口を出せないと認識しているビュティが、二人の話が一旦落ち着いたと感じ取ったのかボーボボに近づき、その袖を引っ張った。なんだ？とボーボボがその小さな顔を見る

「あれローなんだったんだろう？」

ビュティが不安げにそう呟く。あれロー黒いボーボボと自分。余りにもそっくりな、いや酷似しているなどというレベルではなかった。それはまさしく自分自身ローあれは一体どのような存在だったのか

シン・・・とする車中。誰もがその疑問を持っていたがローしか触れてはいけなような気で誰も口に出すことを憚っていた。何だかロー許されない領域の存在に感じ取れていたから

「・・・おねえちゃん。あれはクローンだよ。たぶんボーボボとお

ねえちゃんのね」

その沈黙と静寂を破ってポコミが声を発した

「ポコミ・・・知っているのか」

誰もがその答えに納得が行く。誰もがそれを予想していた。しかし認められなかったその許されざる存在

「詳しくは・・・ポコミも知らない。ポコミは研究所の一階の培養ルームにいたから。でもバブウ達の声はよく聞こえていたよ。地下でー何だかすごく大変なモノが培養されていたみたいだった。三世も良く見に来てた・・・三世は良く言っていたよ。「バブウ、BBの・・・クローンの状態はどうだ？」って・・・まさか三大王の一人がクローンだなんて・・・」

「そんな・・・じゃあ・・・あの黒いボーボボはクローンなの？誰かの変装とかじゃなくって？」

ビュティがそうポコミに尋ねる。その肩にボーボボの手が置かれる
「あの鼻毛真拳は本物だぜビュティ。軍艦みてェに我流で身につけたとかそーい類のモンじゃ全然ねえーそれに俺の真拳とクセもパワーも何もかも同じだったぜ。っていうかなー俺自身が分かる。アレは俺だよ」

ボーボボのその言葉。再び沈黙が訪れる

「なら・・・あの女の子は？すごく強かったよ！私の・・・クローンなら真拳なんて使えない筈だよ！」

その疑問。確かにそうだった。ボーボボのクローンが彼と同じ能力を持つているのなら、あの黒い少女もビュティと同じくー戦闘は不可能ではないのか？

「ー確かに、ね。でもおねえちゃん。クローンを作った目的を考えれば・・・恐らくおねえちゃんのツツコミ能力を真拳化したんじゃないかな？ボーボボはおねえちゃんのツツコミがあればその力が何倍にもなる。それをバブウ達研究班が解析していたんだよたぶん。だからーて、おかしいな・・・それならなんであの黒いおねえちゃんは尖鋭兵団のリーダーと一緒にネオ新宿区に来たんだろ

？BBと一緒にいる筈だよね・・・それで私たちに挑んでくる筈だよね」

その外見と年齢に不釣り合いなポコミの冷静な分析に一行は感嘆の溜息をつく。確かに彼女の疑問は最もだ。何故黒い少女はBBと共にいないのか？

「確か「彼女は僕専用のツツコミだ」とあの男は言っていたが・・・」

ソフトンがそう呟く

「BBは一人で消えちゃった。あの黒いおねえちゃんは尖鋭兵団のリーダーと一緒に消えた・・・どういうこと？何かおかしい・・・帝国内で何が起きているの？」

沈黙を守っているボーボボの心中――

強制的に融合させられたあの瞬間――あの黒い俺の感情が入ってきた

お前を殺す

お前を殺して、俺は俺になる
奪われたもの全てを取り返す

俺は何でも知ってるぜ。お前のことなら何でも

いいなあお前は。最初は一人だったみてえだが、今はそんなにたくさん仲間がいる

大切な宝物だって傍にいる

何だって知ってるぜ

幸せな人生だなあ

なあ、それに比べて俺はどうだ？

あの胸クソ悪イ培養液の中でいきなり生まれて、誰とも喋らねえ、触れられねえ、たったひとり

用意されていた、たった一つの宝物でさえ横取りされちゃったんだぜ？

なあ、不公平だと思わねえか？お前と俺は同じなのに

お前が憎らしくてたまらねえ

俺は

お前なんか死ねばいいと思ってる（作者サイトに挿絵有・PC対応）

その――あの衣服や髪のように余りにも黒い、暗い感情、激情
哀しい、感情

それを感じ取ったのは俺だけだ。一体どうなっちまってんだ

俺が他人を――可哀想なんぞ思うなんて

様々な疑惑を乗せ、一行は東京湾を一路ネオ台東区へ進んで行った

疾走（前書き）

B
・B
サイドです
ブラック・ボーボボ

疾走

走る 走る 走る

殺せ

走る 走る 走る

ヤツを殺せ 殺せ 殺せ

「うるせえ！」

BBは叫んだ。頭の中に響き渡る気味の悪い声が彼を苦しめる――
――あまりの頭痛に立ち止まった

「――どこ、だ……ここは……」

周囲を見回せば砂と岩しか見渡らない荒涼とした大地が青空の下何処までも続いていた。先程までは近代的な都市に居た筈なのに自分はどれだけ走り続けていたのだろうか

「俺は――何なんだ……？ 何故ここにいる？ 何故……」

何故彼等と――彼と戦っていたのだろうか？ 自分と色違いの男。ただ刷り込まれた本能に従い彼を殺そうとした。そして自分が本物になるのだと。それだけを考えて戦った。彼の周囲にはたくさんの仲間達――知っている。桜色の少女――知っている。刷り込まれた記憶。融合した瞬間流れ込んできた彼の記憶。それは自分のものになる筈だったのに。自分は何故ひとりなんだろう

「ポッドを出て――それから……」

それから自分はどうかやってあいつらの元に辿り着いたのだろうか？ そもそも妙な喋り方をする男に服従するように刷り込まれているのに何故その男はどこにもいないのか？ 確か――ポッドが壊れた音は覚えてる。ガシャンと嫌な音が聞こえて何か黒いものが見えて――培養液が流れていって――自分の中に培養されていた頃にロードされたオリジナルの記憶だけの筈なのに――たったひとつだけ、自分だけの記憶がある。あるはずの無い心の片隅に、濃い霧の

中に微かに見える黒髪の少女

「知ってる――ぞ・・・あの子・・・一緒に・・・居た・・・筈・・・」

微かな記憶。オリジナルと戦っていた所にあの少女は現れた。細身の若い男と一緒に――その瞬間頭の中で何かが弾けた。高い声、甘い匂い、強い口調――何もかも知ってる。分からないのはその名前だけ

「――痛ってえ・・・!」

頭に針に刺されたような衝撃が走る

殺せ

殺せ

オリジナルを殺し、お前がただ一人の本物になるのだ
細胞の時点から組み込まれた深い洗脳。少女を思い出そうとすれば
する程その信号が脳内を占める

「く・・・そ――何なんだよ・・・」

また体が勝手に走り出す

オリジナルを殺す為に

彼の意志とは無関係に

「畜生――!」

あの黒い少女は自分を決して見なかった

初めて会ったように視線は冷たい無関心だった

自分と同じ黒い髪、紅い瞳

何故俺を見なかったんだ? 話しかけなかったんだ?

遠ざかっていくお前に体は反応し――お前の名前を――叫ぼう
とした

だがどうしても――思い出せなかった

だから替わりに叫んだんだ

「思い出してくれ」と

お前と俺は

ずっと

一緒に――

断片的に浮かぶ記憶。強い衝撃に抜け落ちてしまった記憶を必死に
手繰り寄せながら、B Bはただ走り続けていた

説得（前書き）

帝国（柊・邪ティ・キング三世）サイドです

説得

「ただいまー！邪ティ晩御飯だよー！」

バン！と邪ティの寝室の扉を勢い良く開けて柊とパンツ丸が入ってきた

「今日は鰻！バトルしたし精をつけなきゃねー！ー！」

邪ティが横たわっているベッド端にぼん！と座り、持っている盆を彼女に近づける

「うるせえよ！テンション高すぎてうぜえ！」

額に青筋を起てて意地で瞳を閉じていた邪ティだったが、鰻の蒲焼の匂いが強烈に鼻についてがばりと起き上がってにこにここと笑う柊にツッコんだ

「はいはいおかわりしてねー！魚沼産のコシヒカリですよー！」

何故か給食のおばちゃんコスプレでこてこてお茶碗にごはんを装っている柊は上機嫌に笑っている

「イヤそれもう一人のイケメンのキャラだろー！ー！」

起きたばかりでも次々との確なツツコミをしている邪ティを、おひつを持ったパンツ丸はスゲエなあとただ感嘆して見上げていた（作者サイトに挿絵有・PC対応）

「えーとねえ・・・取り合えずお茶どーぞ」

食堂で柊は対面に座り不機嫌な邪ティにそうジャスミン茶を勧めた。彼の所々は凍っており、パンツ丸はそれを溶かそうと一生懸命温かいおしぼりで拭いていた

「――で、どうだったんだよ？私の存在はもうバレてただろ？」

邪ティは気を取り直してお茶を呑みながらそう質問する。時計は深夜。長すぎたー邪ティは一抹の不安を持っていたのだ。明るく振舞っているが彼はかなりな正念場に立たされた筈だーもし彼

が戻ってこれなかったらどうすればいいのか？と――不安になって彼女は中々寝付けなかったのだ。だからこのような時間まで眠っていた

「ん――まあそれはしょうがないよ。元々はあの後殺しに行く計画だったんだしさ……。だからね、この際君の存在をオープンにしちゃったの。一年前研究所から逃走した君を僕が匿って隠していましたが、クローンは帝国に非常に強い憎しみを持ってるから引き渡しませんでした、ってね」

「そんな釈明でよく戻ってこれたな……」

邪ティの言葉に柊は自分の首をきゅっと掴み舌を出した

「怒ってたよー怖かったー。まあ何とかバブウに全部責任押し付けてうやむやにしちゃった。彼は君に凍らせられて何にも出来ないからねえ……。死人に口ナシってヤツ？――大丈夫。君を引き渡すようなことはしないよ……」

消されかけた、というような柊の仕草に驚いていた邪ティだったが、その柊が真剣な瞳で自分をじっと見詰めてきたので思わずその視線を外した

「――でも、ね……。三世様が君を見たいってさ」

その言葉。邪ティは椅子から立ち上がった

「なんだと？お前やっぱり――」

「違う違うって。よく聞いてよ……」

柊は両手を前に広げてまあまあ、と座るように促してきた。冗談じゃない、誰があんな所に戻るものか。あんな冷たくて寒くて――孤独な培養液の中に戻るものか

「三世様はね、君に興味津津なの。僕も何でかは分からない。一年前君が逃走した時もそうだった。僕に全権を与えてまで君を無傷で捕らえるようにまで言ってきたんだ――傍に置きたいって、ね・・」

「ふざけるな！絶対にイヤだ！」

傍に置く、という意味は彼女にとって服従を意味することに思えた。

女性としての意味は理解出来ない。何の意味も無く造られ、洗脳され、利用される――その原因を作ったのはキングだ。二度と感じたくないあの絶対的な寒さを覚えこまれた原因は彼だ。バブウを殺害しその恨みを晴らした彼女の次の復讐はキングを殺害することなのだ

「うん――でもさ君の目的はキングを殺すこと・・・でしょ？大体彼が全ての元凶なんだから。でも今は難しい位頭のイイ君なら分かるでしょ？黒賭博騎兵衆は壊滅したけどまだ僕の兵团も残ってるし、白幻死装徒も沈黙を守ってる」

「ああそうかよ！ならいいよ私を城に連れてけよ！お前が自分の地位を守ろうとしてるなら――」

柊は無言で声を荒げる邪ティを見詰めている。邪ティは彼に裏切られたような気がして舌打ちしながら再度立ち上がった。初めて会って互いに共闘を誓ったあの約束はなんだった？だからこそ私はお前の命令を聞いてどんな任務でもこなしてきたのに

「わ・・・邪ティどこ行く気だよっ！？アニキの言うこと聞かなきゃだめだぜ！」

ハラハラと二人の喧騒を見上げていたパンツ丸は邪ティが立ち上がって扉に向かおうとするのを必死に止めた。二人が争っているのを見たくない小さな相棒は、少女が彼から離れればどのような状況に陥るかよく分かっていた

「うるさ・・・?!」

いつのまに―――本当にいつの間にそこにいたのか、椅子に座っていた筈の柊が扉を隠すように立ち塞がり、邪ティの肩を掴んだ

「連れて行くよ―――キングは君が欲しくて仕方ないんだ。でも大丈夫。僕がそんなことはさせない」

柊の手が邪ティの細い顎に掛かった。細い腰に手を添え、ぐっと引き寄せる

「させてたまるか―――君は僕のものだ」

驚く小さな唇が―――塞がれた

自動的に目的地に向かうようプログラムされた車の後部座席――柊の隣に座っている邪ティは無言だった

「とにかく仕方ないから君を連れて三世様に謁見するよ。何を言われても黙って感情が無いようにしててね。君は僕の洗脳が完了して、感情を無くしてって説明してあるからさ。何とか旨く誘導して尖鋭兵団に入れますっていう感じにするから。それなら今と全く変わらないし、君は存在を認められて動くことは可能だから。いいね？何を言われても我慢しててね・・・」

柊が打ち合わせの言葉を次々と発してくるが邪ティは上の空で窓の外をぼうっと見ている。何だか意識がはっきりしない。先程唇を塞がれたとき何か喉に押し込まれてきたのを感じたが、どうも記憶が曖昧になっている。何だかずっと前に同じようなことをされた気がするが――それはいつだっただろうか？

「聞ってるー？ねえねえ・・・」

顔の前にひらひらと掌をかざして、覗き込んで来る端正な顔

「――な、な――！アニキってハジケリストだったんだなあ！それってすげえよなあ！俺知らなかったぜ！」

邪ティの肩に乗っているパンツ丸がそう取り成すようにあははと笑う。邪ティはどうしたんだろう？アニキに口をくつつけられて何だか人形みてえにぼうっとしちまった――アニキは怒っているのかなあ？何かヘンだ・・・いつもと違う・・・こんなのはやだぜ――「んー？そーだよ僕キングオブハジケリストなのさ！まだまだあんな鰻スク水なんかじゃ僕のハジケは表現出来ないさ！もっともっと凄いハジケをその内お披露目しよう！」

あははと笑い返し柊は何時もの人懐っこい笑顔だ。パンツ丸はその表情に安堵する

「――柊・・・」

視線は窓の外のまま、邪ティの唇が動いた

「なに？酔っちゃったの？大丈夫？邪ティ」

「おまえ・・・あんなネックレスつけてたか・・・？」

柊は常にマフラーを着用し、可愛らしい着ぐるみを身につけ、自宅でもハイネックのセーターなどを着ているためその素肌は殆ど見えない。宿敵との戦闘時示したH型のネックレス。そんなものは初めて見たような気がする

「普段はつけてないけど？」

柊は首筋に手をあててそう答える。パンツ丸はいきなり何を言い出すのかと不思議そうに無表情の少女を見上げた

「・・・鈴・・・いや、釣鐘・・・みたいな・・・形の・・・つけてなかったか？」

臃気な記憶――あれはいつだった？ネオ新宿区に行く前――一度だけ、何故か彼の蒼い瞳が赤く変化して――ガラスが割れる音、金属音、圧迫――見たことも無い表情で――唇を塞がれた――時

喧騒の中、彼のマフラーがずれて――ちらりと見えたそのネックレス

「つけてないよ」

にっこりと柊は笑って、彼女が少しでも楽なようにリクライニングを後ろに降ろしてやった

「夢でも見たんじゃない？――着いたら起こしてあげるから少し眠りなよ」

額に手をあてられ瞳を閉じるように促され、ぼうつとした意識の彼女は素直に目を閉じた

「何にも心配することは無いよ。君は何も考えなくていい。全部僕にまかshoいて」

何故か彼の高い声が遠くから聞こえる。エコーが掛かっているように何度も何度もそれが繰り返される

「君は僕の言うことだけ聞いてればいいんだ」

そして少女は完全な眠りに落ちていった――

キング暗殺（前書き）

帝国（柊・邪ティ・キング三世）サイドです

キング暗殺

何故俺はあの少女のクローンがここまで引っ掛かっている？

あの少女が研究所を脱走した一年前――

確かに聞こえたのだ

ソレヲケシテハナラナイ

ソレハサイゴノ

キュウサイシャ

と――

救済者？何のことだ？まさかこの俺が救いなどを求めているとでもいうのか？

違う

俺では無い――何か、もっと大きな――この世界そのもののよう

あゝの声は何だったのだ？何故俺はあの声に抗えなかった？

あのクローンは一体なんだというのだ？

あれはただ俺がバブウに命じて――

未知の研究と不完全な覚醒

決して踏み入れてはならなかった領域

そのような倫理観など、帝王である俺には何の気にすることも無い

筈だ

だが

だが何だ？一体なんだというのだ？

何故俺はあの声に抗えなかった？唯一無為の帝王である俺が抗えぬ
だと？

とにかくあのクローンの少女を傍に置くのだ
そうすればこの謎は解けるかも知れぬ

この帝王である俺にとって
畏れ
などというものは決してあってはならないものなのだから

「――遅くなりました。キング」

玉座に座り物思いに耽っていた三世は、玉座の間に入ってきた柊の
声に視線を向けた

「・・・誰もいないんですね」

三世以外誰も居ないシン・・・とした広間。柊はゆっくりと赤いカ
ーペットを歩んでくる。が――

「クローンの少女は何処にいるのだ？」

歩んで来るのは柊一人。他は誰もいない

「――帝国城内に入る車の中までは一緒だったんですけど・・・
降りた途端逃げちゃいました。今部下に探させてます」

悪びれる様子も無くそうふざけたように言い放つ柊に思わず三世は
立ち上がった

「貴様・・・この期に及んで私を謀る気か？　どうということなのだ！
まさか貴様・・・！」

煩悶の元であったクローンの少女をやっと手に入れることが出来る
と踏んでいた三世の怒り――一種落胆の表情は柊を少なからず驚
かせた。それでもその笑顔を崩さず、昨日のようにその玉座の傍ら
に立つ

「――キング？　何故そんなにあの子にご執心なのですか？」

耳元に吹き込まれてくるような柊の言葉。その忠臣としては余りに
も近い距離に三世は眉を顰める

「貴様如きが知ったことではない。さっさと探し出し私の前に連れ
て来い」

それは

（あのクローンは）

あれはまさか

瞬間、頭上に白い閃光が光った

遥か高い強化ガラスー天からの白い閃光は黒い少女の氷に覆われた手刀（作者サイトに挿絵有・PC対応）

「！」

その頭上に確かな鋭い殺意を感じ取った三世が反射的に身を背けると、鋭く硬い閃光が頬を掠め、血飛沫が舞った

「クローンかッ?!」

背後に降り立ったであろう黒い小さな塊に視線を向けるー

流れるような黒髪、透き通るような白い肌、大きな紅い瞳が憎憎しげに自らを睨みつけていた。背筋を撫で上げられるかのような強い眼力、ゾクリとさせられる冷たく鋭い光

「ちっ・・・!」

しかしその認識は一瞬のことで、小さな舌打ちと共に少女は床を蹴り、信じ難いスピードで振り向き様の三世の巨体に一気に距離を詰めてきた。再び光る鋭い手刀ー

「おもしろい・・・面白いぞ小娘!」

三世がその頑強な鎧に覆われた肉体に力を込め、背に備え付けられている触手のような物体が鋭く尖った瞬間ー

「そこまでだね。クローン」

柊がその二人の間に素早く割って入ったー黒い少女の一瞬の躊躇を見逃さず

「あっ・・・」

その氷に覆われた手首を掴み、ぐいつ、とその小さな身体を引き寄せる

「柊！」

三世の咎めるような声――柊は自邸の時と同じく――その唇を重ねた

その感触――緊張感に身を研ぎ澄ませていた少女の意識が強烈に遠ざかった

もー打ち合わせが台無しじゃん。何処行っちゃったのかと思ってた
らいつの間に玉座の間に入り込んだの？

あいつを殺すんだ！私は！邪魔すんな！離せよ！

パンツ丸は必死こいて君を探してるっていうのにもー

何飲ませたんだよ！

おうち出る前に飲ませたのに・・・もしかしてもうあんまり効かない？

またあのヘンなクスリかよ？！あんなのもう効かない！離せってば！

そう思ってコレはつよいオクスリ。はいはいもう大人しくしてね

――何なんだよコレ・・・

眠くなるだけだって。大丈夫僕に任せてってばー

――二人で・・・今・・・攻撃すれば――

だからねえ、それじゃ意味無いの

――お、まえ・・・何考えて・・・んだ、よ――

がくりと力が抜け、意識を失ったであろう少女の体を柊は軽々と抱え上げた

「――柊、まさか殺したのではないであろうな」

三世はその身に纏う闘気を収め、柊の腕の中の小さな顔を覗き込む

「まさか。こんな貴重な実験体を殺したりしませんよ勿体ない。眠らせただけです」

先程の鋭い殺意は勿論消え失せ、静かな呼吸をする瞳を閉じた華奢な少女。自然界の法則とは全く異なった方法で生まれた少女。別の世界から来た少女――細胞の時点から、その黒髪一本一本、爪の先まで自分が創り上げた少女――

「感情は無くしていた筈だったんですが・・・キングへの憎しみは深層心理に深く根付いていたみたいですね」

柊はゆっくりと少女を抱いたまま玉座から離れカーペットを歩んでいく

「それを寄越せ」

玉座にゆっくりと座りなおし、頬の血を拭いながら三世はそう柊の背中に命じた

「そのような華奢な体にして信じ難いスピード、少女にして閃光の氷刀――気に入った」

柊はゆっくりと振り向く。三世の表情は――皮肉な笑みが浮かんでいた

「これは危険です。貴方を本能から殺そうとしています。取り敢えずは尖鋭兵団のアジトに閉じ込めておきましょう」

そう予定通りに提案し、柊は扉に向かおうとした――瞬間

「いや、俺の傍に置く」

三世の背にある触手のような物体が不思議に伸び、柊の身体を覆うように接近しその腕の中の意識を失っている少女の身体を取り上げ――それがまた元通りに収縮した

「これだけの能力を持つモノならば非常に役立つ。内部の不穏分子の粛清に適している。貴様以外に存在自体を知られていない少女なら――」

ぐったりとした少女の体を膝の上に乗せ、三世はクク・・・と楽しそうに笑った

「それは貴方を殺そうとしている」

皮肉な笑いは幾らでも見たことがあるが、帝王のそのような笑みを見たことがあっただろうか

「そういう存在を傍に置いておくというのもまた一興だ。他国も殆ど蹂躪尽くした――最近では俺と同等の力を持った者もおらぬ――少々退屈していたのだ。いつ寝首を掻かれるか分らんという緊張感も中々に楽しいものだ」

「・・・枕元に刀を刺して眠るようなものですがねえ・・・」

ハハハと高笑いし、上機嫌な三世に柊は内心驚いていたが、その明晰な頭脳は常に回転し打開策を見つけ出そうとしている

「柊、この少女の名は何と言う？研究時の試作品番号クローンでは何とも味気ない。貴様が便宜上つけているであろう」

少女の前髪を掴み、俯いていたその顔を上げさせ覗き込む。先程までの鋭い暗殺者の雰囲気は全く無い。冷たい美しさを持った、無力な美少女にしか見えなかった――しかし瞳を開ければまた俺を先程のように睨み付けてくるだろう。触れれば斬れてしまいそうなあの鋭い紅い瞳で――笑いが堪えられなかった

「――はあ・・・一応はオリジナルの少女の名を元にして――」

「何と言う？」

柊は一つ溜息をつく

「邪ティ、です」

――一瞬の沈黙

「――そうか、邪ティか」

三世は少女の身体をその腕に抱えたまま勢い良く立ち上がった

「では邪ティ、お前はもう俺のモノだ。せいぜい俺を楽しませてくれ。ハハハ・・・」

高らかに笑う帝王。その光景を柊は静かな瞳で見上げる

そして自然な動作で――マフラーの中に手を入れた

「――ま、ちょっとずれちゃったけど・・・」

歪んだ微笑を形作る唇

「計画通りだ」

白幻死装徒登場（前書き）

ポーポー一行サイドです

白幻死装徒登場

ボーボボ一行はネオ東京湾を抜け、帝国の支配下に無いミサト国から上陸した。そして川伝いにネオ葛飾区に潜入。海上からの侵入者防備に大量の毛狩り隊が配置されているであろうネオ江戸川区を突破しこちらの戦力を消耗するよりも、実際ススキに囲まれただけの辺境ミサト国から川を使ってネオ葛飾区に侵入した方が良いというポコミの意見からだった

「おおおらあああー！ー！国境の橋突破ー！ー！って何で国境にダレもいねえーの？何でこんな無防備なんだあ？」

ミサト国とネオ葛飾区を分かち橋には、当然配置されているであろう警備兵が一人としておらず、あっさりと川を進むバビロン33号はネオ葛飾区に入った。外壁にくくりつけられ、当然ハジケる準備をしていたであろう首領パッチが水音と共につまらなそうにそう叫んでいた

「・・・そうだな。おかしい。何故だ？」

ソフトンがバビロン33号のハンドルを操作し、ブレーキを掛ける「・・・畏、って考えるのが妥当かも・・・実際この辺はもう白幻死装徒のエリア内だよ。かなりの実力を持つ番人がいると思っていって・・・ポコミは思うよ」

腕を組んだボーボボに二人が視線を向けた、がー！ー

「なあ！とりあえずメシにしようぜー！ビュティ！ハラ減った！あの旨いヤツ作ってくれよー！野菜炒めたヤツの上に何か甘辛エ肉のつてるヤツ！」

外壁にくくりつけられていた首領パッチが窓から凄い勢いで入り込んできてビュティの背後に覆い被さって来た

「なんだよ痛いってば！もう・・・ええと・・・チンジャオロウス

ーのこと？それ食べたいの？」

「首領パッチ離れるのら！ビュティかまらにおなか打たれて疲れてるのら！女の子のおなかは大事なのら！」

「おい首領パッチ！今日は俺が食事当番だ！ビュティさんに負担ばっか掛けてんじゃないぞ！」

ビュティに甘えるように被さりぶんぶん振り回している首領パッチに、ビュティの腕にすがり付いている田楽マンとヘッポコ丸が声を荒げ、それを引き剥がそうとした

「えーお前の料理味濃いだけでまじいからやだ！おい破天荒！野菜切つとけ！ピーマンはボーボボのヤローが未だに苦くてイヤンみてえなガキだから余計にたくさん入れるかな！中の種みてーなのも餡かけにしようぜー！んでビュティが味付けな！折角新しい地区に入っただし、今まで戦いばっかだったんだしよお！今日は旨いメシ食って休もうぜえ！なああ！ビュティいいだろお？デザートはリソグがいいー！あのウサギ形のやってくれよー！アレおもしれえし！この間破天荒にやらせたらよお・・・俺の形にしかアイツ作れねえんだよーなあなあ・・・」

甘えるように首領パッチはビュティを振り回しながらそう叫ぶ。命令を受けた破天荒は嬉しそうにタケノコやらピーマンやらをキッチン野菜室から取り出して凄いい勢いで下処理を始めた。その喧騒に「いえ、首領パッチ君形に切れるアナタの子分のがすっごいデス・・・実際トゲの部分をどう切ったのさ・・・」と静かにツツコミながらも、ビュティはちらりとボーボボを見る

「・・・あーそうすつか。ビュティも疲れてるだろうしな・・・悪イが味付けだけしてやってくれや。だが引き続きガ王と天の助は見張りだ！永久にウ○コに張り付かせておく！おい聞こえてるかクズ共！敵の影が少しでも見えたらすぐその役立たずの体四散して知らせろ！」

一同ひでえ・・・とヒキまくるが、ビュティはにっこりと笑い首に縋りついている首領パッチの両脇に手を差し入れ抱き、自分の前に

トン、と置いた

「じゃあ美味しい味付けするから、へっくんとソフトンさんはお米の用意お願いね！ポコミちゃんと田ちゃんは食器を拭いてね。ポーボボはオフロの用意してくれる？」

桜色の笑顔に一同ふわりと穏やかな気持ちになる。戦いの連続でこの笑顔は非常に貴重な、かけがえの無いものだった

「おう！」

首領パッチが精一杯の笑顔で勢い良く破天荒の包丁の下に飛んできた。ポーボボ達も笑顔でそれぞれの仕事に向かう。このバビロン33号には簡易キッチンやユニットバスもあり、敵地に潜入する移動基地としては最適だった。勿論だからこそハンペンだのところてんだのを無視してこれを選んだのであるが・・・

「今日はおやびんのなますッスかー！この破天荒歓喜の極み才気煥発の極みッ！ーででもそれっておやびんを食べていいってコトー！」

「ああっダメ！私初めてなの優しくして！」

「食材を無駄にすんなー！ー！」

タケノコが鼻血で赤く染まっているのにツッコミながらビュティは再度ポーボボを見る

「ーこれでもいいの？」

「ーお前がそうしててくれんのが、俺らにとっちゃ一番の休息なんだよ。」

サンングラスの下の視線は細められる

「よしっ！お肉の下味をつけるよ！」

笑顔を返しーエプロンを羽織ろうとしたー

「おねえちゃん！」

ポコミの鋭い声が響き渡った瞬間、バビロン33号に強い衝撃が走った！

「きゃ・・・きゃあああっ！」

強い振動にバビロン33号は均衡を崩し、足元に角度が生まれタケ

ノコヤリング、包丁などの食器が宙に舞う。破天荒が持っていた包丁が近くにいたビュティの後頭部に落ちてくるのをポコミは自らの髪飾りを投げその方向を変えた

「ビュティ！」

ボーボボが慌てて駆け寄って来るが、強い地震のような不安定な足元に中々近づけない。恐らく水面が激しく揺れているのだろう

「ボーボボ！何か衝撃波が飛んできやがった！」

「おっせええええよ！消費期限切れのクズが！」

「ダンナー！俺既に細切れコアラー！お料理に入れてね・・・姐さんおさらばあああー！」

天の助とガ王の泣きそうな声が窓の外から聞こえて来るー！ー！ボーボボは悪態をつきながらも何とかビュティの細い腕を掴み、その腕に抱えた

「ビュティ！俺に掴まってろよ！」

「うん！」

ビュティはボーボボの胸付近を強く掴み瞳をしっかりと開ける。だがー！とにかくこの激しい振動ではどうしようもない。戦士達が扉から外に出ようと視線を合わせた瞬間

「お野菜を無駄にするなんて・・・」

号内に澄んだ声が響き渡りー！

「許せませんわ！行きますわよー！」

ー！ー！ー！ー！

「果物野菜真拳奥義！＜食べ物は大切に！＞」

バン！と扉が開きー！ー！大量の野菜が勢い良く飛んできた！

「あ痛って！」

見事な密度の高原キャベツが首領パッチのトゲに何個も突き刺さり針千本を封じた！

「えええー？！！」

トゲトゲキュウリの尖端がヘッポコ丸の○○○に突き刺さってその真拳を封じた！

「うわ！ありえねえ！」

ちゃんと根取りをしたもやしが破天荒の鍵の丸い部分に絡みつき使用不可に！

「田楽味噌は大豆100%だけどそのまま味噌が原材料になってヘンな焼き鳥みたいのら？」

田楽マンの蒟蒻にふくら煮大豆そのままがくつつき使用不可に！

「くっ・・・俺の最大の弱点をッ・・・」

繊維質が豊富でお通じに最適な泥付きゴボウがソフトンのナニカ・・・を封じた！

「お約束で少女マンガのヒロインはニンジンが苦手ー☆！」

何故か魔法のステッキが皮まで食べれそうな柔らかいニンジンになっ
てしまいいポコミの真拳を封じた！

様々な混乱の中、四散していた野菜が一筋の嵐となり円を描くよう
に扉付近に集結して行きー

「食べ物粗末にする者を私は許さない！」

轟音と共に集結した野菜がハジケ飛んだ！

「私の果物野菜真拳でその腐った根性新鮮に瑞々しくして差し上げ
ますわ！」

「イヤイヤイヤ！アンタが一番野菜粗末にしてない！？」

扉付近に立ち、その周囲にはボトボトと床に野菜が四散している・・・

・ボーボボに抱えられながらも思わずツツコんだビュティさん

「くっ・・・好き嫌いは許しません！」

「流したー?!」

扉に立つ人物は水玉模様の可愛らしい帽子を被り、長い髪、白い肌、
大きな瞳ー美しい女性であった。カラフルな衣装に身を包み、
その長く細い腕はキッチン付近をビツ！と指差していた

「先程から聞いていれば・・・やれビタミン豊富のピーマンさんが
苦くて歯裏の神経にじわじわと侵食しその緑の繊維質が広がり（中
略）のがイヤだの、お肌に最適リングさんをウサギ科に属する草食
哺乳類形を詳細に表現するべきアートオブティマニズム芸術に仕上

げろ（中略）だの・・・食べ物にケチをつけるなんて言語道断食品批判は許しませんわよ！」

「そこまで詳細に言っただけえー！ってか逆に気持ち悪いよ！」
ぐっ、とビュティの体が逞しい腕に引き上げられた

「ボーボボ！このおねえさんはナインエキスパート白幻死装徒の一人・果物野菜真拳の使い手チェリーナ☆！」

ポコミが必死にステッキをニンジンのかんづから外そうとしながらボーボボとビュティに叫ぶ。実際そのステッキが無効であれば彼女はドレスアップが出来ず、通常の戦士よりは勿論格上であろうが超エリート集団であるナインエキスパート・チェリーナに立ち向かう力はない。常に冷静に戦局分析を行う彼女が、唯一最初の一撃を回避したボーボボに迎撃の指示を与えるのは最適と言えた。実際はビュティを抱えているからこそボーボボは回避出来たのであろうが――
「帝国城内で開催されたくわかってこいYA！真拳使い！>武闘会で女性ながら優勝しナインエキスパートに加えられたとされる強敵だ！ボーボボ気をつけろ！」

ゴボウのかんづに最早（色んな意味でトイレの前から）蹲って動けないソフトンは、その長けた情報収集能力からのデータをボーボボに与える。その美しい外見からは想像も付かない程の強敵！

「この敵は俺たちの真拳の適正に合った攻撃を仕掛けて来るぞ！」

「真拳ってかソフトンさんの場合はその存在自体を押さえ込まれたんじゃないのかー！！」

ビュティさんの鋭いツツコミに、思わずチェリーナもほう、と感嘆の溜息

「お嬢さん・・・貴女はお野菜を大事に調理し、感謝を捧げながら美味しく食べて下さる方の方ですわね・・・いいわ。アフロさん、早くその女の子を離しなさいな。その子に危害は加えませんわ。その上で正々堂々産地偽造無しにお手合わせ致しましょう・・・」

チェリーナはビュティを指差し、にやりと笑う

「・・・ビュティ（イヤかもしれないわねが）・・・ソフトンの所まで

ゆっくり下がりな」

そつとビュティの体を離し、促す。心配そうにボーボボを見上げるビュティではあったが、自分が居れば彼の邪魔になること位分かってきている彼女はゆっくりと下がっていった。勿論チェリーナに警戒しながらであるが、残虐非道と伝え聞くナインエキスパートである筈の彼女は意外にも何の行動も起こさなかった

「ふん・・・救いようのねえヤツばかりだと思ってたが、帝国にもちったープライドがあるヤツがいるじゃねえか・・・だが・・・容赦しねえぜー」

ビュティが充分離れたのを確認し、ボーボボは体勢を整え拳を握った

「ふふ・・・偉大なるキング三世様を一度は倒したというボボボ・ボ・ボーボボ。貴方の實力見せて頂きましょうか・・・」

チェリーナもビュティが離れたのを確認し、その右手をゆっくりと挙げた

真拳を封じられた他戦士達が固唾を呑んで見守るバビロン33号ーー一触即発の雰囲気の中、小さな眩きがソフトンの腕の中で庇われるビュティの耳に届いた

「ボーボボのバカが・・・お前が女なんかとマトモに戦えるワケねーだろが・・・」

それはキャベツを新しいウオシャレ・スタイルと認識し鏡を見るパチ美の、珍しくも真剣な声だった

白幻死装徒登場（後書き）

作中に登場する「チェリーナ」さんは、原作の読者参加型企画「かかってこいや！真拳使い！」で見事金賞を獲得された「マジデールCの激闘記」マジデールCさんの創造キャラクターを元に作者が設定を加えたキャラクターです。出演のご承諾は頂いております。

決着（前書き）

ボーボボ一行サイドです

決着

この世界のハジケバトルには一定のルールがある――それは

ツツコミにまわったら負け

ビュティのように珠玉のツツコミ属性を持つ者は別だが、基本ボケばかり（ツツコミ待ち）の中で如何に自分が飲み込まれずキャラを立ててボケられるか――それが勝者なのだ。如何に圧倒的な力を持っている者でもボケに飲み込まれツツコミにまわった時点で敗北が決定する。ボケの畳みかけによって強敵を倒してきたボーボボパーティー――

その、美しく優雅な白幻死装徒チェリーナは意外にも生真面目キャラでは無くボケ体質だったのだった。ボケてボケてボケまくり、ボーボボが思わずツツコミにまわってしまい――「そうだよな！」と納得させられる最大奥義でケリをつけられた――敗北

「いでででで！そーだよな千足屋の果物は確かに高エよな――がはあっ！」

チェリーナの最大奥義＜千足屋の果物は何故あんなに高いのかしら＞多数の果物野菜のパワーをドガガガ！と加えられ身体精神的に大ダメージを喰らったツツコミボーボボは大量の吐血をし、ぐらりとその大柄な体の均衡を崩した

「でもそれはモノがイイからだ――！ってボーボボー――！」
ビュティのツツコミ&悲痛な叫びがボーボボに届く。倒れるわけにはいかない――と視線を上げた先には・・・蜜柑？

「私の勝利です！ボーボボを討ち取りましたわ！」

チェリーナは尚もパワーを落とさず、その白い肌に汗を流しながら勝利宣言をした瞬間！

「キターーーーー！ 五代目女形きくごろおおおおおお！」

バン！と凶悪な食材がハジケ飛んだ！

「融合完了パッチボボ！」

ボトボトと食材が床に落ちていく中ーーーー手にネギを持つ、少々の吊りあがった大きな瞳を持つ青年が現れた

「首領パッチ君！？」

ビュティは思わず自分の隣を仰ぎ見る。先程までトゲにレタスを刺し鏡を見ていたパチ美は忽然と姿を消していた。彼はチェリーナの食材に蜜柑のフリをして巧妙に紛れボーボボと融合したのだった！
「・・・ふ・・・融合戦士というものですわね・・・データはバブウ様から頂いておりますわ！ 私の果物野菜真拳の前には赤子同然です！」

チェリーナにとっては予定調和内なのか、その右手を挙げまたもや奥義を繰り出そうとしたが

「どうかな」

普段の首領パッチとは正反対の低く落ち着いた声が響き、その手の葱ソードをずっとチェリーナに向ける

「ボーボボは俺の中で気絶させた。戦闘員ならば俺は女でも容赦は一切しない。負ける訳にはいかないからな」

「戯言を！葱と最も合う食材！＜檸檬の醤油漬け＞をお喰らいなさい！」

「合うワケねえだろが蜂蜜に漬けんかーーーーー！」

大量の茶色い檸檬果汁がパッチボボを襲う！またしてもビュティさんの的確なツツコミが響く！

「ビュティ！後方支援頼む！」

パッチボボは一瞬ビュティを振り返り、両手を合わせた

「物質ハジケ融合！葱&檸檬果汁&ストロー！ウォーターキャノン・オブ・レモン！」

「首領パッチソードペ○ング二刀流！」

「ヤキソバに葱って？ー！ー！きゃああー！ー！」

同じボケネタを使ってしまったチェリーナに最早勝機は無かった。油で揚げた麺に動きを封じられ備え付けのかやくが舞う中ー！ロングヒットを続けるペヤン○ソース塗れの葱ソードの前に敗北したー！どしゃ、と倒れる華奢な体。長く青い美しい髪がその体を覆った

「ハジケはカブるモンじゃねえぜ？」

ボン！とパッチボボはボーボボと首領パッチに戻ったー！

「・・・確かに・・・結構美味しそうですわ・・・レトルト食品といえどお野菜入れた方が健康にいいですしー！私の負けです・・・さあ殺しなさい」

真拳マスターであるチェリーナの闘気が消えたからか、他仲間達の真拳を封じていた食材は消えた。バビロン33号の中心に倒れるチェリーナの周囲に、警戒を解かず仲間達が集まる

「へーえ、結構潔いんだな」

首領パッチがチェリーナを見下ろし葱を向ける。思わずビュティは首領パッチのトゲを掴んだ

「だ、ダメだよ首領パッチ君！女の人を殺すなんてー！ー」

「でもおねえちゃん☆この人はエリート中のエリート、白幻死装徒の一人だよー！ー」

ポコミは呪縛の外れたステッキをぶん、と一回振った

「ー！ー殺さぬまでも、捕虜として拘束すべきではなからうか？」

ソフトンがビュティの様子を見てそう提案するがポコミは首を振る。白幻死装徒の一員ともあろう戦士がそのような状態に陥れば自ら命を絶つこと位分かりきっているのだ。ビュティはその場の緊張感に床にブツ潰れたままのボーボボを見るが、彼は未だパッチボボの中で気絶させられたままで、そのアフロには蜜柑が何個も植えつけら

れている。ならばこの場の決定権は――一番冷静に戦力を分析し帝国内の情報に最も詳しいポコミ。どうすればいいのか、頼りになるボーボボは気絶している――女の人を殺すなんて・・・ヒト、を殺すなんて・・・いくら敵だからってそんなのはいや――ポコミのステッキが最早完全無抵抗なチェリーナに向けられた。周囲も仕方ないと視線を反らした――

「ビュティがイヤがってんだから止めよーぜ」

明るい声がある場に響き渡り――ポコミのステッキが葱に阻まれた「パッチン・・・止めないでよ☆これからもっと厳しい闘いになるんだから遺恨の種は少しでも・・・」

「うっせえなチビガキ――オイ野菜ねーちゃん。お前けっこーイケてるハジケリストだから楽しかったぜ？何度でも挑んで来いな。またハジケ合おうぜ！俺は伝説のハジケリスト・キング首領パッチ！覚えとけ！」

首領パッチは周囲の反応などお構いなしにそう明るくチェリーナに声を掛ける

「ほら仙豆だ、食べ」

と――

「それは別の漫画のハジケコラボだ！」

ビュティさんのツッコミ――それでもその声色は安心したように、首領パッチに感謝するように

「パッチン！彼女の体力を回復させてどうするの！また挑んでくるよ！――みんな臨戦態勢を・・・？」

チェリーナが回復したのを感じたポコミは距離を空け仲間達に指示を出す――何故か周囲の者はみな臨戦態勢を取らなかった。ゆっくりと起き上がるチェリーナをただ見詰め、軽い溜息をついているだけ

「――一度敗れたからには、またの舞台の時までバトルはお預け――ふ・・・ハジケリストたる者の心根を教えて頂きましたわ・・・」

チェリーナは少々ふらつきながら首領パッチを見――その後方に庇われているビュティに視線を向ける

「・・・お嬢さん・・・貴女がいらっしゃる限りその蜜柑君を倒すのは難しそうですわー！またがあるとは・・・思えませんが、もしまたお会い出来ることがあれば、その時は私のお野菜や果物を調理して頂きたいものです・・・」

「え・・・？」

ビュティはチェリーナの意外な程の優しい眼差しに、一抹の不安感を持った

「じゃあお前さ、俺らの仲間になりやいいじゃねえか！そうすりゃ食材仕入れる必要ねえし！お前が出してくれよ！」

首領パッチはビュティの手を引いてチェリーナの前に立つ

「俺！好き嫌いねんだぜ！コイツに作らせた料理ならぜってー残さねえからな！」

にこつと嬉しそうに首領パッチは笑った

「――ふふ・・・楽しそう、ですわ、ねー」

チェリーナは戦闘中の笑顔とは全く違う微笑みを首領パッチに向け、くるりと背を向け扉に向かう――

「・・・白幻死装徒は残り二人。私など及びも付かぬ強者があなた方をお待ちしておりますわー！ネオ葛飾区から都心に向かう交通の要所、ネオ西日暮里駅長が白幻死装徒のNO.2です。彼は真拳使いでは無く、飛び道具が得意な戦闘スタイル――さっさと行つて殺されておしまいなさい・・・では、御機嫌よう」

チェリーナは不敵な笑顔に戻ると、巨大な人参を出現させそれに乗って空を飛んでいってしまった

「・・・教えてくれたんだよ・・・あの女の人・・・敵や地理の情報・・・」

不条理な乗り物であつという間に消えてしまったチェリーナ――

裏切り行為とも思えるその情報享受。ぐちゃぐちゃに散らかったバビロン33号の片づけを皆でしながら、ビュティは隣で「お、コレ食べそう!」などと遊んでいる首領パッチに小さな声で話しかける「んーそうなのか?」

首領パッチは牛蒡のぬかみそ漬けを齧り「やっぱマズ!でも食べねって程じゃねえな」とかやってさほど興味なさそうにビュティを見上げた

「――あの女の人हतぶん、今日中に処理されるか改造手術を受けるよ☆」

背後からポコミの冷たい声が響いた。ビュティはえ?というように振り返る

「改造戦士は一度でも敗北すれば、また改造を受けさせられる☆ポコミも名古屋で負けて・・・もし帝国に戻っていたらそうだったよ・・・記憶は消える。戦闘に必要なこと以外はね。リセットされーー」

「おいビュティ!メシ!一杯野菜増えたから早くあの旨いピーマン肉炒め作れ!あーハラ減ってイライラしてきた!」

首領パッチはポコミの言葉を遮るようにビュティの肩に飛び乗った。ポコミの言葉は余りにも冷たく、現実の残酷さを表していたからーーその言葉の意味にビュティの顔色が白くなっていくのが彼にとっては最もイラつくことだったから

「・・・だから☆ーーあの時・・・」

「チビガキ!早く風呂沸かせよ!ビュティ俺の頭洗えよ!レタスの糸みてえのが一杯ついててかゆいーー!」

「わわっ・・・首領パッチ君!痛いってばーー!やめろよう!」
首領パッチはレタスの千切りをビュティの髪にブチまけてわしゃわしゃしているーポコミの言葉の後半は聞こえなかったようだった
「やめねえ!オマエを苛めていいのは俺だけなの!」

ふう、とポコミは溜息をつくーーだめだあのオレンジのハジケ君は・・・ふざけてばっかでーー困るビュティをキッチンにぐいぐ

い引つ張っていく首領パッチを追おうとしたが

「まあまあ、いいじゃねえか参謀さん。首領パッチはヤツなりに考えてんだよ」

背後から低い声が掛けられ――

「おら、メシ出来るまでに片付けようぜ」

気絶しっぱなしだった筈のボーボボだった。いつのまにかポコミの背後に立ち崩れた野菜を幾つか持って「まだ食えるか・・・？」などと首領パッチと同じようなことをしていた

「ボーボボ☆気付いていたでしょ。チェリーナが逃げる前にも――
――なんで狸寝入りしてたの？」

「さあ？今起きたばかりだけどな」

彼は敗北したからこそ、その決定権を首領パッチに譲ったのだ。自分の存在があれば、皆その決定を彼に決めさせるから。敗北者である自分にはその権利は無いと――それは勿論首領パッチを信賴していたから

「戦力を削る為にわざわざ遠回りしてネオ葛飾区から潜入したって
いうのに☆敵を逃がしてどうすんの？」

「いーいんだよアレでな。アレがハジケバトルっーモンなんだよ
天才戦士さん？そろそろ慣れてくんねえとな？」

ボーボボは楽しそうに笑っている。納得出来ないポコミが反論しよう
と口を開こうとすると

「それに――ビュティにそーいう所見せたくねえんだよ」

――結局それかと――ポコミはハア・・ともう一度溜息をついた。
もういいや、と

「――もしもう一度☆・・あのチェリーナが闘いを挑んできた
ら――今度はポコミが相手をするからね。そしたら決定権はポ
コミだよ？」

そう一言強い口調でボーボボを見上げ、ポコミは風呂の準備をする
為に歩み出した

「首領パッチ君！なにすんだよ！破天荒さんと寝なよ！」

「アイツ一緒に寝てると鼻血垂れてきて気持ち悪いのよ！493発ブン殴ったら気絶しちゃったわ！」

一行の就寝はバビロン33号のリビング。家具をどけて衝立をし、ビュティとポコミは簡易ベッド、他野郎共は床に布団を敷いて雑魚寝（破天荒は気絶）――ビュティ達の簡易ベッドに首領パッチは潜り込んで、枕をさっと取ったのだ

「何よもうヒロインぶってベッドなんか寝ちゃってさあ！他の男の子達は床に雑魚寝よ？なにアンタとチビガキだけ特別扱いなのよ！」

パチ美と化した首領パッチがスケスケピンクネグリジェに身を固めて、起き上がったビュティをベッドから落っこそうと蹴りを加えている

「首領パッチ！ビュティさんは女性なんだから――ってわああすみません！」

その喧騒に耐え切れなくなったヘッポコ丸が衝立から姿を現すが、ビュティのピンクのパジャマ姿に顔を真っ赤にして視線を反らす

「パチ美だって女の子だもん！」

「ンなワケねえだろ――が！」

長い足が勢い良く（異常に）伸びてきて照れる土器土器ヘッポコ丸ごと首領パッチを蹴り飛ばした

「ボボ美！何すんのよ！この性悪女は関東スケ番連合の裏バンなのよ？ここで仕留めておかなきゃ！」

「えいっ！」

「きゃあああ！犯される――！」

ビュティはパチ美の一瞬の隙を付いてそのネグリジェを破った

「分かったよもう！一緒に寝よう・・・ごめんポコミちゃん、ちょ

っただけずれて・・・」

ガタガタとその身を押さえて震えるパチ美をその腕に抱え、ビュティは毛布を被った

「・・・パッチンうるっさい☆・・・いい加減静かにしてよ」

うざったそうに背を向け横たわるポコミは毛布を頭から被り、呟く
「ビュティおねえちゃんと寝たいだけでしょ・・・ポコミは毎晩一緒だよーだ☆」

毛布の中からのなので衝立の向こうには聴こえなかっただろう

「チビガキむかつく！ーもごっ？」

「ハイハイおやすみ！首領パッチ君！」

いい加減皆の睡眠時間を削られるのは適わないとビュティは首領パッチの口を小さな手で押さえ、胸に強く押し付けた

「・・・」

そのーー柔らかい感触に反論出来ないのか、首領パッチは静かになった（一応男の子だし）

ーーー

暫くの静かな時間の経過ーーすうすうと頭上から響く寝息

「・・・ま、いっか・・・やわらけーし、いい匂いすっし・・・」

清潔な匂いのするパジャマに顔を押し付け、女の子特有の甘い匂いに安心感を持ってーー首領パッチは微笑を浮かべ瞳を閉じた

恋慕（前書き）

B・Bブラック・ボーボサイドです。想起させる性的な描写が入りますが年齢制限はありません。苦手な方は閲覧をお控え下さい

恋慕

鬱蒼とした木々が密集する森の中だった。見上げても木々に囲まれ曇天から雨粒が落ちているのが微かに見えるだけだった。薄暗い中――その先には山肌が露出している部分にくりぬいた様な洞穴が認識できた

「・・・ここは・・・」

B Bはあてもなく彷徨い――いつのまにか深い森の中にいた。冷たい雨粒が頬にあたる。手近な洞穴を見つけそこに移動した

「・・・？何か・・・ここ・・・来たことあるな・・・」

何故だろう？見覚えがある。外の薄暗い光に照らされるごつごつとした岩肌、湿気を含んだ冷たい空気、さして深くない最奥の少々出っ張った岩――以前そこに何か軽いものを降ろした事があった。肩に抱えていた柔らかく温かいもの――

ここにベッド置いて俺は寝っ転がって

柔らかいものを隣に置いて

――抱き締めて

「・・・あったかかった、な――」

抱き締めた、壊れそうに柔らかな体を

触れた、さらさらとした肌を

感じた、甘くて優しい匂いを

聴こえた――絶望に塗れた否定の叫び

「・・・ッ！」

いきなり胸の奥に鋭い痛みを感じた。心臓を鷲掴みにされたような苦痛。呼吸が苦しい、頭が痛い――思わずその場に膝をついた

「・・・なんなんだよ――」

いやだ

やめろ

されそうになったけど

いやっていったら やめてくれたんだ

だから

だから わたしは

――絶望に塗れた拒絶の泣き声が脳内に響く

ごめんな

そんなつもりじゃ無かったんだ

悪かったよ 怖がらせちまって

ただお前が 他の奴と比べたから

その瞬間すっげえムカついて

だから

すまねえ

そんな顔しないでくれ 泣き止んでくれ

頼む

――泣き顔が浮かぶ。それは先程ネオ新宿で出会った黒い少女に重なった

「・・・あの子だ・・・やっぱそうだ――俺はあの子とここで――」

ここで？何をしたんだ？一緒にいた？何故だ？

――ぼんやりした感覚がいきなり明るくなって、培養硝子が割れる音が響いて、目を開けたらタカラモンがいたんだ

すっげえ綺麗だ。俺のモンだ。綺麗な服をやるうな？ずっと用意してたんだぜ？お前に似合う黒いワンピース

――さっき言ってた「されそうになった」ってーのは誰に「されそう」になったんだ

あいつだ。ネオ新宿でお前の隣に当たり前のように居た細身の若い男――そいつは百億回位生まれてきたのを後悔する程度にブツ殺してやるよ。俺様のタカラモンに手エ出そうとするたあな

当たたり前だ。俺のモンなんだよお前は

――ブチ殺――――す――！ぶちぶちぶちぶちブチ殺――――ス――！！マジ殺す！食い殺す！ハジケ殺す――！！！！

何でそんなに慌ててんだよ？あのニヤけたガキを殺されたくねえのかよ？ムカつく

「……すっげームカツクけど済んだことぐちぐち言う男は嫌われちまうな。よし！なら今から、リセットだ！

そうだよな。嫌われたくねえし。いーからじっとしてろよ

「……へんなことじゃねーよ。ディスクなオンナにオトコがするあったりまえのコトだ

痛かったか？ごめんな。そんなに怒るなよ

「……コレで完了！俺様のマーキング完……了！ハイもう俺のモン確定！

そうだ。コレでいいんだ。俺の痕付けといたからコレでもう俺のモンだ

「……なんでオマエが目覚めた時、俺を目覚めさせなかったんだ？俺のポッドを壊してくれなかった？あの時一緒に目覚めてたら……」

「一緒にいられたのに」

何の作為も無く、自然にその言葉は発せられた。俺は今何を言ったんだ？

「……それが当たり前だったのに」

何を言っているのか自分でも分からない……俺はその混乱の感情のまま、てくてくと洞穴の奥に進むと湯気が立ち込める空間に出た。鍾乳洞のように天井が高く、その尖った岩に滴り落ちる雫が幾つかの自然の窪みを作り、そこに熱い湯が満たされていた

「……あの子の体を洗ったつけ……な……？」

俺のアフロがパカリと開いて……そこからシャンプーやらバスタオルが勝手に出てきた

「……綺麗なモンだから……俺が汚しちまったから……お前は怒って……だから洗ったんだよ……」

さっきから何で俺は独り言を呟いてんだよ。誰に向かって喋ってんだ？ここには俺以外誰もいねえじゃねえかよ……俺は訳が分からず先程の冷たい洞穴奥に戻ると

「・・・なんで？」

またアフロがぱかりと開いて――パイプベッドが飛び出しガン！と岩に落ちた

お前の頭の中ホントにどーなってんだよ？四次元なのか？

耳――でなく、頭の中に響く――幻聴？高い声、元気な澆漑とした声、鈴のように軽やかな気持ちのいい声

「・・・」

俺はパイプベッドに座った。寝っ転がって――毛布を開けてスペースを作る

さあどうぞお嬢さんおねむの時間ですよ？

はあ？何言ってるんだ？

強引に引き寄せて――何をしたんだっけ？

「！」

何だ？足の間に強い刺激が走った。ジーンズを圧迫される痛み――思わずそこを押さえた

キモチいーだろ？ちっちゃけど、感度いーな・・・

「はあっ・・・っ――！！」

かわいいな、おまえ

「も、う・・・やめ・・・は・・・あっ・・・」

なんだ俺を誘ってんのか？その涙は泣いてる訳じゃねーよな？

「・・・も、やめ、てよ・・・お、ねがい・・・だか、ら・・・」

「

今日はここまでにしよーと思ってたが・・・やめれねーな・・・んな瞳見ちまうと

「ッ・・・」

どうしようもない疼きが下腹部を覆った――ベルトを外し、それを引き出す

「・・・やだ・・・」

中には挿れねーから、大丈夫だ。心配すんな・・・痛くねーか？

「・・・い、たくないけ、ど・・・あつ、い・・・」

これから毎日こーしてオマエの体を慣らしてやるよ。今はムリだろーけど、その内出来るよーにしてやつから安心しな

「――な、に・・・？」

本能の衝動のままーそれを搔く

しよーがねーだろ。今のおまえに挿れるワケにいかねーんだから

「や・・・やだっ・・・」

別に痛エことしてねーだろ？少しガマンしてりゃ終わる・・・

それは硬く太く膨張するー脳裏に刻み付けられたー否定と羞恥に塗れた声にシンクロするように

ー手エひっこめんなよ

「――？ーえっ・・・？！」

何かがー弾けた

ハッ・・・と大きく息を吐いた

「・・・なんなんだよ・・・畜生・・・」

自分の手は粘着質の液体に覆われ、気持ちが悪かった。シートでそれを乱暴に拭い衣服を整えて立ち上がったーこの森には見覚え

がある。もつと奥まで行けば、あの子と共に行った場所に行けば――きつと思ひ出すかもしれない

「お前の名前……？」

思ひ出すのだ、あの黒い少女の名を。あの少女の名を思ひ出せばきつと自分はこの洞穴の空気のような冷たい世界から抜け出せる。永遠に続くと思われる孤独の寒さから抜け出すことが出来るかもしれない――細胞に刻み付けられた命令に反する、本能が強烈に命令を下す

「もつと他の洞穴にも行った……小さな小屋にも行った――崖にも行って――」

不確かで不鮮明な記憶を頼りに洞穴を出た。雨は白い雪に変わりその精悍な肩を覆っていく――あの時はこの肩に大切なタカラモンが居たから雪に覆われることなど無かったのに――無言でその歩を進ませる

「待ってろよ――迎えに行く。お前は俺の――」
宝物だ

細胞に組み込まれた命令を必死に拒絶し、BBはただ、ある筈の無い心に刻み付けられた記憶に即して――深い森を歩んで行った

カゲの世界概念（前書き）

帝国（柊・邪ティ・キング三世）サイドです

「如果這樣1」（ムーンライトノベルズ投稿）での設定（下記該当（注A～E）部分）が入ります

（A）・・・邪ティさんはバブウ様の研究所で培養ポッドから自分で抜け出し、目覚めました。その際に「メザメロ・・・」という声を聞きました

（B）・・・BB確保に向かい、バブウ様を倒した邪ティさんはポッドから抜け出したBBに攫われて性的な行為を仕掛けられました
（C）・・・邪ティさんは研究所で目覚め、その場に居た三世様とバブウ様に最大奥義でダメージを与え逃走

（D）・・・逃走した邪ティさんは間一髪の所で柊さんに救われ彼の自宅に匿われます。その際に自分の生成データを見せられます

（E）・・・三世様は目覚め反抗する邪ティさんを消去しようしますが、その瞬間三世様は「ケシテハナラナイ」という声を聞き、攻撃しようとしたバブウ様を止めようとした

カゲの世界概念

「……………」

腕の中の少女が小さな声を発し——ゆっくりとその瞳を開けた視界には

「ジャテイ、と申すようだな」

自らを作り出した——最も憎むべき紅髪を持つ男の笑顔があった
「殺してや——？」

少女——邪ティは瞬間、全くといってもいい程自らの体に力が入らない事に驚いた

「ふむ、いい瞳だ。その鋭さは如何に私が動きを封じようと衰えぬようだな」

楽しそうに——非常に楽しそうなその口調。この広大な帝国全てを束ねる絶対的な象徴——キング三世

「私に何しやがった！」

かろうじて動く首を振り自らの状況を確認する。帝国玉座の間——玉座に座る三世、その膝の上、豪華な手甲の腕に抱えられている自分——柊……柊は何処にいる？

「離せこのッ……柊！柊は……」

悔しい事にどんなに集中しても力が入らない。微かな冷氣すら発することが出来ない——自分は先程まで玉座の間に潜み、柊が三世と話している隙に暗殺しようと飛び込み——柊が間に割って入ってきて

「あやつは兵舎に戻った」

何か薬のようなものを飲まされ——そこから意識が無い

「何で……」

なんでだ？私を見捨てたのか？やっぱり私を三世に引き渡すつもりだったのか？なんでだよ！なんで……

「?!」

いきなり自らの体が引き上げられたのを感じた。三世は困惑の表情を浮かべる邪ティに全く構うことなく、その華奢な身を抱えながら立ち上がり、歩き出したのだ

「こーの・・・離せ！離せてんだよこの野郎！畜生！」

悔しさに歯を噛み締めるがどうしようもなくこーにせめて恭順の意を汲み取られぬよう必死に頭上の顔を睨み付ける

「お前は私の邪眼の力により一定期間動けぬのだ。知力は高いようであるがやはり子供か？クツ・・だがその瞳はよい。私の邪眼に全く怯まぬとはなこーNINEエキスパートでさえこの私を直視出来ぬというものだ・・やはりこの世界の者とは違うな」

ハハハ、と高笑いをしながら三世は歩みこー玉座の背後の扉を開けた

「こー？」

ギツ・・と重厚な扉が開くとその向こうはこー近代的な強化ガラスで整えられた玉座の間とは正反対に暗黒の世界が広がっていた。光一筋すら無いようなその中へ三世は特に臆することも無く歩みを進めていく

「な・・んだよこーココ・・？」

背後の扉が自動的に閉じるとこー全くの暗闇ではあったが、光苔でも繁殖しているのであろうか？ごつごつとした岩肌がぼんやりと浮かび上がっているのが微かな視界に入るこー洞窟のような、非常に長いトンネルのような

「こー元の記憶は完全に消去されているのだな。柊の洗脳も完璧のようだ」

一人言のように三世は呟き、邪ティの困惑しきっている表情を覗き込む

「・・・な、に・・・」

近づいてくる精悍な顔、逆に挑むように睨み付けながらもこーその青い瞳に妙な光を感じる

「そろそろだ。さあこー見るが良い」

暗闇であつた視界が急に開け――

白い光に一瞬瞳を瞑った邪ティの視界に飛び込んできたのは――
荒涼とした世界

草木一本すらも存在しない、砂と岩だけの世界

青いとは言い難い、太陽も雲も見当たらない何処までも続く白い空
ただ荒涼とした地平線

風すらも吹かない、耳に痛い程の静寂

音の無い

生命の無い

なんにもない 世界

何だろう？私は知っている？――この寂しいだけの世界を？

「お前がいた世界だ」

ただその世界を凝視している邪ティに三世の声が掛けられた――
？とその顔を見る

「クローンよ。お前は便宜上クローンと呼ばれていたがそれはこの
世界の住人であつたからである。私が居るオモテの世界との胸像で
あるこのカゲの世界の住人。オリジナルである桜色の黒いカゲ――
クローンである黒いお前だ」

どういうことだ？一年前帝国研究所から逃走した自分は終に救われ、
自らの生成データを見せられた。その中では自分はオリジナルであ
る少女の一本の髪から細胞を組み立てられ、培養ポッドの中で誕生
した筈だつた

「実際細胞クローンからの研究は進めておつたが、どうしても細胞
分裂の時点で育たなかつた。だからこそ私は文献だけであつたカゲ
の世界を調べさせこの世界を見つけ出したのだ」

なんだって？ならば私は一体なんなんだ？この世界の住人？知らない――そんな記憶は全く無い。あるのは一年前研究所で目覚めた瞬間からの記憶

サア、目覚メローーと（A）

「少女よ――お前はRPGツクールゲームなどをしたことがあるか？子供向けの遊戯ではあるが」

ふっと口調を変え、三世は唐突にそのようなことを言い出した。まるで御伽噺を幼子に聞かせるような――？という視線を向ける

「主人公は冒険の旅に出る――さあ、まずは町で情報収集をするのだ。その住人に話し掛け冒険のヒントを得る――」

何を訳の分からない事を――と口を挟もうとした邪ティの小さな顔にずい、と青い瞳が近づいた

「主人公が話しかけるまで、町の住人はただ歩いているだけだ。喋らず、食わず、眠らず――ただランダムに何の人間性も意志も無く――ただ彷徨い続けている存在」

ニッ――と薄い唇が上がった

「この世界――カゲの世界の住人達とはそのようなものなのだ」

「アニキ！何ゆっくりお茶なんか飲んでんだよ！ちつくしょ・・・ならいいぜ！俺が助けに行くから！――わっ？！・・・」

「あーうっさいなあ」

蒼の尖鋭兵団の兵舎、司令官室の椅子に座りお茶を飲んでいる柊は足元の裾をくいくいと引っ張るパンツ丸をひよいと摘み上げた。彼ら二人以外は誰もいない

「み・・・見損なったぜアニキ！邪ティがどうなってもいいってのかよ！俺が必死こいて探し回ってる時に三世に邪ティを引渡しちま

うなんてよ！ちくしょー！離せよアニーッぶ！」

バタバタと両手足を振り回しながら暴れるパンツ丸の体をぐしゃぐしゃと丸めお茶のカップに放り込む

「平気だよ」

んー！んー！とカップから脱出しようと必死になっている布切れを押さえつけながらクスリと笑う

「計画通りだから」

バシャ！と派手に飛沫を上げてパンツ丸が飛び出した

「邪ティはっ・・・ネオ新宿に行く前ー！BBのヤローに・・・ひ、ひどいコトー！さ、されっ・・・って・・・またー！またそんな目に遭わせようってのかよー！！ばかつ！アニキのばかー！邪ティは女の子なんだぜっ！？そりゃ滅茶苦茶強エし勇氣もあるし頭イイけどよオ！女の子なんだ！男の俺らが守ってやんなきゃダメなんだっ」(B)

茶の水分をたっぷり吸っているの、その丸い瞳から流れているものが何なのかはー！はっきりは判別できない

「じゃ、とつと助けに行つてあげたらあ？頑張つてね。僕はお仕事行つて来るから」

ぽい、とカップ毎パンツ丸を床に放り投げて柵はゆっくりと立ち上がり扉に向かう

「アニキ！」

がぼつと起き上がりその背中に声を張り上げるが、彼の歩みは全く変化しない

「一人では何も出来ず、ただ息巻くだけの矮小な存在が僕にお説教？引き裂かれない？」

扉を開け、廊下に出る

「い・・・っ・・・いいよ！もうアニキなんか頼まねー！よっ！俺一人でも邪ティを助け出してみせるからな！」

扉が閉まる瞬間

「今晚はカレーにするからね。邪ティの大好きな海老入れるヤツ。

気が済んだらお家に帰って海老の下ごしらえしといて。あとアボガドのサラダも作ろうかなあ・・・」

「意志が無い住人達には国家を構成する意志も勿論無い。人間関係を形成する意志も無い。闘争する意志すらも――」

「どういふことなのか？この世界は何の概念的な構成も無く、人間関係すら存在せず、ただただランダムにRPG世界の街の住人達のようにただ彷徨い歩くだけの存在であるといふのか」

「私は宿敵である男と、その男の強さの基軸である少女のカゲを見つけ出すように指示をした。当然ランダムであると思われたお前とあの男のカゲは――何故であろうか？共に荒野を歩いていたそう
だ」

三世は見渡す限りの荒涼とした世界を仰ぎ見る

「お陰で探索と捕縛は非常に容易ではあったが・・・貴様らはただ歩きカゲの男はお前を肩に抱え、全くの無言・無表情で――何処に向かっていたのか――捕縛にはさぞかし抵抗されると予想しイカ影という部下に一軍を率いさせたが全くの無抵抗であったという――その貴様らを監禁した場所が今通ってきた洞窟だ」

邪ティは思わず振り向くが――先程一瞬の光に瞳を閉じて消えたあの洞窟は全く見当たらない

「それでも貴様らは全く抵抗せず脱出を図ることも無く――ただ自動人形のようにこの世界に連行された。私はバブウに貴様らの洗脳を命じ、細胞単位で全くの白紙状態である貴様らにオリジナルの記憶をプログラムさせたのだ。バブウの研究である古今東西あらゆる戦闘データを貴様らにプログラムし、そして戦闘以外の感情を排除し――オリジナル以上の完璧なクローン・・・カゲの戦士が誕生する筈であったのだが・・・」

三世は邪ティに視線を戻す

「お前は自ら目覚め――意志を生じさせ――私の元から離れていった」(C)

「う・・・うるさいっ！ふざけるなよ！そんなウソに騙されるもんかつ！柊はそんな事は言ってなかった！」

先程から三世の妙な視線に居心地の悪さを感じている邪ティは声を荒げる。彼女にとっては柊の言葉だけが世界の全てであったから――完全なる洗脳・依存状態

「ヤツがどこまで知っているのかは私も把握しておらぬ――妙な男だ。三大王打診の際のあの瞳・・・」
益々顔が近づいてくる

「お前を自らに依存させる為にそう偽計したのやも知れぬ、が(D)――お前は私の手に戻った。これから真実を知るがいい。全く調査が進まぬこの世界の謎を解き明かすには、意志の無いカゲの世界人でありながらも明確な生きる意志を発生したお前が鍵なのだ。あの声――一年前お前が研究所から逃走する際に我が脳裏に響いたあの声――」

ケシテハナラナイ ソレハサイゴのキュウサイシャ (E)

あの声は――この全く解明されておらぬこのカゲの世界の――支配者の声ではなからうか？

オモテの世界に引き出されたこの少女に意志を与え、カゲの支配者は何を考えている？

我が帝国――いや、オモテの世界をどうしようと考えているのか？

「離せ・・・柊の所に戻せよっ！」

何故彼はいないのだろう？いつも助けてくれたのに。いつも優しく笑って・・・一番の親友なのに――コイツの言ってる事なんて全部デタラメだ。柊の言ってることが正しいんだ。私はクローン。オ

リジナルの桜色の少女から作られ培養ポッドで育った複製――

「その洗脳も除々に解いてやろう・・・」

不意に額に手甲で覆われた大きな手が添えられ――強烈な眠気が襲ってきた

「お前は私のものだ。私がこの世界から連れ出し、そして一度無し・・・一から作り上げた」

三世の低い声が脳内に響き渡る。荒涼とした故郷を映す視界が狭まって行く――

「オモテの世界は崩壊しかかっている。神よりも上位の存在によって」

三世はゆっくりと空を仰ぎ見る

「お前は崩壊を続けるオモテの世界を再構築させる為に――カゲの世界の支配者の意志によって送り込まれてきたのだろうか？私がお前を連れ出した事もまた支配者の手の平の上であつたのやも知れぬな・・・」

地平線の彼方に視線を向ける

「最後の救済者である少女よ」

そして――意識を失う寸前の少女に視線を戻し

「世界を救え」

カゲの世界概念（後書き）

RPGツクルの部分是一家集英社「レベルE」富樫義博先生を一部参考にさせて頂きました

シャオ・ジー登場

柊は尖鋭兵団の兵舎を出、自動プログラミングされた車で帝国郊外の自宅へと戻った

「……」

長い廊下を歩き、一つの扉を開ける――モダンな内装とは正反対の石造りの階段が現れ、無言でその階下を下りて行く

「……なんだっけ暗証番号……あの子にまかせっぱなしだったからなあ……」

重厚な鉄の扉の前に立ち、ノブ上に設置されているナンバープレートボタンを幾つか押すとカチリ、という音が響き扉が自動的に開いた――室内に入る

「……どなたツスカ」

暗い室内の奥から微かな声が響いてきた――柊は歩みを止める

「……？あのお嬢さんじゃないスね……」

ゆっくりと歩みだす――笑顔を浮かべ

「シャオ・ジー。僕だよ」

「……？」

不意にぼんやりとした青い照明が点った。30坪程の狭い一室。しかしそこは居住空間のようなものでは決してなく、大きな鈍く光る無数のポッドがぎっしりと並び空気が籠っていた

「……蒼の尖鋭兵団の団長さん……スよね……確か……アンタ……」

陰気な声が暗闇から様子を伺うように響き続ける

「以前帝国首都の建国祭パーティーで会ったでしょ？覚えてる僕のコト？」

「あ……あーあー！なるほど！アンタがあのお嬢さんのボスっ

てことッスか？へえ！」

シャオ・ジーと呼ばれた男はいきなり頓狂な声を上げ、暗闇から飛び出してきた。無防備に柵に近づき彼をまじまじと見た

「君だけ？起きちゃったのは？」

「・・・そうッスが」

頓狂な声は瞬時に消え、最初の印象どおりの陰気な声音に戻る――年齢は20代中頃という所だろうか。細身の柵とは正反対に盛り上がった筋肉をタイトなダークグリーンのシャツに包み、そのシャツの中央には「○人注意」というロゴがあった。小柄ではあるがぶ厚いタイヤを思わせるような筋骨隆々とした肉体は圧倒される迫力がある。少々グレーが入った黒髪に眼下の金色の刺青、眠そうに細められている同じく金色の瞳

「やっぱり君は薬物に耐性があるの？困ったなあ・・・洗脳完了してないでしょ？・・・困っちゃったな」

頭一つ高いシャオ・ジーを見上げる

「帝国内全ての戦士・地理・基地・兵団に精通し――全ての<判定役>として殺傷許可権を持っている君を仲間にしたかったんだけど」

スッ・・・と手を上げ

「洗脳が効かないんじゃない？・・・僕にとっては計画がバレちゃうことになっちゃうから」

「・・・どうすんスか？」

室内がパツと明るくなった。恐らく人感センサーが内臓されているのだらう。柵の手の動きに反応し明るくなった室内は

先程まで青白く照らされていた無数のポッドには鈍い色の液体が満たされ

その中には人型――人間と思しき物体が、液体に揺れて存在していた

ポコポコという音はポッド下方に設置されている台座のようなものから上へ泡となって際限なく生じ

台座からは大小様々なコードが伸び、中央にある小さなボックスへと繋がっていた

「君はどうして目覚めてるのに逃げなかったの？君なら暗証コード位簡単に解けるでしょ？」

手を下ろし、明るい光の中柙はシャオ・ジーを見る。彼はハア？という馬鹿にしたような、とぼけた表情を浮かべた

「自分はある黒いお嬢さんに敗けましたから。敗者は勝者の意志に従うしかないじゃねえッスカ――このポッドの中身は皆あのお嬢さんが集めたんスカ？」

その陰気な言葉を聞いた柙は途端に嬉しそうな表情になった

「そ！あの子、強いでしょ？君程の男でも流石に勝てなかったですよー。あの子はねえやっと思つた僕の最高の相方なんだよー」

「・・・あのお嬢さん、この世界の住人じゃねえようなんスカ」ふっと宙を仰ぎ、思い出したようにシャオ・ジーは呟く

「拳を交えても読めなかった。何を考えているのか何を望むのか。あんなことは初めてだった・・・自分はあんなイキモノに遭遇したことないス・・・心が読めないなんて――」

彼はその動揺の一瞬の隙を衝かれ、黒い少女に氷漬けにされたのだった――柙の表情から微笑が消えた

「本当に何も読めなかったの？君なら――君の真拳なら何かしら感じれると思っただけだね・・・」

「――いや、たった一つ――微かに・・・ス・・・が・・・」
「なに？」

「一瞬で消えちまりましたが・・・＜荒野＞が見えたツスね・・・
何もない広い空間で、空は灰色、風と砂埃だけの――ただ寂しい
だけの――」

「あとは？」

「あのお嬢さんは――そこに帰りたがっていたような――気配
を・・・感じ・・・た・・・？一人で歩いて・・・いや、もう一人誰か
黒い影のようなものがいたような――」

「シャオ・ジー」

柊の口調が不意に変わり――まるで咎めるような強く低い口調。瞬
間シャオ・ジーは身に総毛立つような戦慄を感じた

「充分だよ。君の能力は全く役に立つね・・・洗脳はムリみたいだけ
ど。君にやって貰いたい事がある。君にしか出来ないことがあるん
だ。それを頼まれてくれないかな？」

柊の細身の体からはつきりと認識できる闘気を感じたシャオ・ジー
は拳を強く握る――先程扉から入ってきた社交的な男は今完全に
消え、明らかに強者としての佇まいを見せる彼に警戒する。返答の
一語に緊張感を研ぎ澄ませ。この端正な容姿を持つ若い男は自分を
どうするつもりか？

「NOと言ったらどうするんス？」

「えー！君の能力でしか出来ないの！おねがい☆ね！」

前に手を合わせ、柊はパンパンと音を起てた

「生憎ッスが自分は――自分より強いヤツにしか従う気はないス」

「君を敗北させたのはキングのみ――だったよね。あの子に敗北
する前までは」

シャオ・ジーの体が除々に――まるで風船が膨らむかのように容
量を増していくのに柊は気づく。彼のダークグリーンのシャツが今
にも破れそうに、はちきれんばかりに伸縮していく――柊の意志
は確実にシャオ・ジーに捕らえられた。彼は――自分を利用しよ
うとしている。要望に逆らえば消そうとしている

「だからこそ君はキングに仕え、そして実力を認められ・・・帝国

内全体の情報を与えられ――キングが許可する全ての不穏分子の殺傷権利を与えられた。殺傷許可証。ただ一人のキング子飼いの暗殺者。君と連絡が取れなくてキングは明らかにイラついているようだったよ。不穏分子は増えているからねえ」

「団長サン。アンタが一番の不穏分子ツスよ」

柎とさほど変わらなかったシャオ・ジーの背丈が最早柎の頭3つ分は大きくなっていた。ミシミシと筋肉が軋む音が室内に響き渡り、周囲のポッドの液体が音を起てて揺れ始めるが柎は微動だにせず、岩のような物体に変化し続けるシャオ・ジーを見上げている

「アンタがあのお嬢さんのボスってんなら――その敗北はアンタを殺すことで抹消される」

シャオ・ジーの後頭部に――金色の球形が幾つも出現し始める。そしてそれは彼の握った両拳に集まり始め――

「俺の真拳は拳で触れた相手の心理・精神全てを判別することが出来る――判別真拳」

その体躯が一層膨らみ――

「アンタは危険だ――何を考えているのか把握してからキングに差し出す」

ドン!とシャオ・ジーの両足が開き床を踏みしめた

「アンタの狙いを判別させて貰う!」

ゴッ――という凄まじい拳の音が柎の腹部に減り込んだ

「判別!」

しかし――

「この僕を判別するだって?」

予想に反して彼の表情は微笑。そしてその瞳は鋭く赤く変化し

「じゃあ僕もすこしだけ、本気を出してあげないといけないかなあ?」

柊の体がゆっくりと沈み――その反動を使い拳が握られ
「帝国の判別者よ」

ズン！

その女性のように細い手から作られた拳からの凄まじい衝撃に、シヤオ・ジーの壮観な体軀はゆっくりと前に沈み始め、喉から血が迫り出して来た

この細身のどこにこんな力が――？

見えない

何も見えない真闇の精神

この男――

判別不可！

シャオ・ジー登場（後書き）

「殺傷許可証」の言葉は白泉社「パタリロ！」魔夜峰夫先生です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0738g/>

如果這樣2（ルークオザーヤン）

2010年10月21日21時43分発行